

〈研究ノート〉

ザクセン・エルツ山地の人形玩具産業（1）

“おもちゃの村” ザイフェンにおける産業の来歴と今

古 川 裕 朗

古 川 順 子

（受付 2009年 11 月 2 日）

は し め に

エルツgebirge（Erzgebirge）は、ザクセンとボヘミアの境界線、つまりドイツとチェコとの国境を成し（ドイツから見て東側）、南西から北東方向に連なる、長さ150 km、幅40 km、標高800～900 m の山地である。このエルツ山地ではかつて鉱山業が栄え、その歴史は古く、中世にまで遡ることができる。例えば、この地域の重要な鉱山都市の一つであるフライベルク（Freiberg）では、1168年にはすでに銀鉱脈が発見されており、このことを鉱物学や冶金学で知られるザクセンの G. アグリコラ（Georgius Agricola:1494-1555）が伝えているという¹⁾。

今ではエルツ山地の鉱山業は、すでに衰退してしまった。しかし、現在エルツ山地は、鉱山にまつわる様々な自然的・文化的資源を蓄えた地域へと変貌を遂げている。エルツ山地一帯は、エルツgebirge・フォークトラント（Erzgebirge-Vogtland）という名のもと、1500 km² に及ぶ大規模な自然公園を形成し、優良なハイキングコースを提供する。そこでは、奇妙な形に変成した岩山や鉱石採掘跡など鉱山地帯特有の風景を目にすることができる。またエルツ山地一帯の諸都市には鉱山業にちなんだ博物館や展示

1) Walter Fellmann, *Sachsen*, Ostfildern, 2009, S. 359.

施設が設けられ、かつての鉱山業の繁栄を偲ばせる。そして、これらの鉱山都市は、ツヴィッカウから始まりドレスデンへと通ずる「銀街道 (Silberstraße)」によって結びつけられている。銀街道は、「休暇街道 (Ferienstraße)」の一つである。休暇街道とは、例えば「ロマンティック街道」や「ドイツメルヘン街道」といった特定のテーマに基づいて設けられた観光・旅行用の街道であり、そのテーマに沿って一つの文化圏が形成される。したがって、この銀街道によって結びつけられた諸都市は一つの鉱山文化圏を形成することになる。

エルツ山地が他方でまた、こうした鉱山業以外に、いわゆる「クリスマスの国 (Weihnachtsland)」としての顔を持つことも忘れてはならない。ドイツでは、クリスマスの 1 ヶ月ほど前から各地で、クリスマス用品を売るための市 (Weihnachtsmarkt) が立つ。日本では一般に「クリスマス・マルクト」という名称で知られる一種の歳の市である。そこでは、クリスマス・ツリーのような機能を持つ「ピラミッド (Pyramide)」, 燭台の役割を果たす「天使と鉱夫 (Engel und Bergmann)」, 様々な職業をモチーフにしたお香を焚くための「煙吐き人形 (Räuchermann)」, E. T. A. ホフマンの童話で知られる「クルミ割り人形 (Nussknacker)」などが売られる。そして、これらの製品の多くを生み出しているのがエルツ山地に他ならない。

エルツ山地では現在でも様々な伝統工芸産業が盛んであるが、とりわけ木材を用いたこうした人形玩具産業がその中心を成す。製品は世界中へ輸出され、エルツ産であることはブランド的価値を有す。エルツ山地の木材人形玩具産業は、鉱山業と入れ替わる形で発展してきたが、やはりこの産業も鉱山業と無関係ではない。鉱山採掘の様子や鉱夫達の姿は、様々な人形玩具のモチーフとして使用される。地下深い暗闇の中で採掘を行う鉱夫と光への切望とをイメージした「天使と鉱夫」などは、こうした鉱山文化を抜きにしては出現し得なかったであろう。

エルツ山地の人形玩具産業は、このように鉱山文化とクリスマス文化との絡み合いの中で独特の工芸製品を生み出してきた。本研究が目論むのは

この両文化との関係においてエルツ山地の人形玩具産業の実態を明らかにすることである。

研究の射程と意義

ではこうした人形玩具産業に対して、私達はどのようにアプローチするべきであろうか？ ここではさしあたり、本研究がいかなる射程と意義を有しているのか、必ずしも網羅的ではない形でいくつかの必要な論点を列挙しておきたい。

まず考えられるのは、エルツ山地の人形玩具産業を工芸史ないし民芸史の文脈において論じることであろう。広義の造形芸術における工芸の位置づけに関しては、一般に純粋芸術と工業製品との緊張関係においてその意義を獲得しようとする傾向が強い。工芸は一方において作品の美的な質や手仕事性を強調し、それによって、大量に生産される安価で粗悪な工業製品からの差別化をはかろうとする。また他方において工芸は、絵画や彫刻などの純粋芸術に対抗し得る実用品の美的価値を打ち立てること、あるいは芸術家に対する職人の地位向上をも目論む。さらに民芸という言葉を用いる場合は、作り手の階層に起因する作品の無名性などが重要な要素として付加され、純粋高級芸術との対立をより鮮明にすることになる。ところが、エルツ山地の人形玩具製作に関しては、純粋芸術との対抗意識が希薄である点、分業と道具の機械化によって効率的な大量生産を積極的に推進してきた点、そして製作者一個人の独創性を特に謳うわけではないが、工房ごとの緩やかなブランド性を押し出すことも躊躇しない点が、これまでの工芸史や民芸史の枠に納まりきらない特徴を有しているように思われる。

エルツ山地の人形玩具産業は、全般的に製品の美的・芸術的価値という観点に関して、それをことさら強調することの無いいわば肩の力の抜けた製作態度を保ってきたと言ってよい。このことは、おそらく日常の実用品にも、単なる鑑賞目的の芸術品にも還元され得ない人形玩具という製品を産出していることにも起因すると思われる。しかし、これは人形玩具の製

作が安楽な環境の中で行われていたということを意味しない。とりわけエルツ山地の東側の地域にとって、人形玩具製作は生計を維持するための切実な手段の一つであった。つまり、美的・芸術的価値の構築を目論む以前に、人形玩具製作がビジネスとして成り立つかが問題であったのである。したがって、エルツ山地の人形玩具製作は工芸史的・民芸史的視点よりも、産業史的・商業史的視点とより馴染むことになる。具体的な論点としては、鉦山業から人形玩具産業への転換、「クリスマスの国」としての観光産業への参入、ドイツ国内のクリスマス・マルクトへの流通や海外への輸出（旧東独時代における西側諸国への輸出を含む）などが考えられる。

また貧困や児童労働といった過酷な労働環境についても見逃すことができない。エルツ山地の人形玩具産業は、社会福祉政策の広がりの中でその労働環境が改善されてきたという経緯を持つ。したがって、社会史的観点からのアプローチも必要になるであろう。

さらに伝統的なキリスト教文化やクリスマス文化、鉦山産業、そして異国文化とが融合することによって生じた独特の習俗・習慣との関連も重要である。例えば、「煙吐き人形」に関しては、トルコ人の喫煙習慣やお香文化からの影響と切り離せない。よって、民俗学的視点も考慮に入れる必要がある。

エルツ産地の人形玩具産業は哲学的美学にとっても興味深い現象となり得る。近年、観光旅行という現象を美的体験の一つとして考察する試みが広がりつつある²⁾。クリスマスの時期にエルツ山地を訪問すること、そこでエルツの郷土製品を旅の記念物として購入すること、あるいは知人や親類家族への贈り物・土産物として購入することなど³⁾、こうした一連の旅

2) 観光旅行を美的体験の一つとして捉える試みには、例えば次の論考がある。津上英輔「感性的営為としての旅——観光美学の構築に向けて」『美學』232号、2008年、2-14頁。

3) エルツ山地の諸製品は、東西冷戦時代に旧東ドイツの親類と引き離されてし

行・購買活動を臨床哲学的に記述することは、哲学的美学の領域を拡張することにもつながるだろう。

エルツ山地の人形玩具産業に関する研究は、以上のような多様で複合的な視点をその射程の内に有しており、このような研究は既存の学術領域を学際的に広げていくという意義があるに違いない。とはいえ、エルツの人形玩具についての日本国内における学術的な研究に関して言えば、私たち筆者の知る限り、今のところほとんど無いに等しい。ゆえに、エルツ山地の人形玩具に関する諸情報をまずは少しずつでも日本国内の学術ルートにのせていくこと自体に大きな意義があると言わねばならない⁴⁾。

さてこのような研究を遂行するにあたって、手始めに本研究ノートではエルツ山地の木製人形玩具産業の中心地の一つであり、「おもちゃの村（Spielzeugdorf）」として知られる「ザイフェン（Seiffen）」について、その産業の来歴と現今の諸事情に関する報告から行っていくことにする。

ザイフェンにおける木製人形玩具産業の来歴

本稿ではザイフェンにおける産業の来歴を確かめるべく、「エルツ山地おもちゃ博物館・ザイフェン」の一連の博物館ガイドの内、第1号⁵⁾の概要を紹介することにする。このガイドブックの紹介にあたって予め断っておくべきことがある。まずこのガイドブックは1945年頃までの産業状況を論じているが、本稿ではさしあたって19世紀頃までの産業状況を介绍するこ

まいった旧西ドイツの人々、あるいは海外へと移住した人々にとって、郷愁を誘うものであった。*Hampelmann & Matroschka -Holzspielzeug aus Deutschland und Rußland*, hrsg. von Karlheinz W. Kopanski, Hannover 1998, S. 154-5.

4) エルツ山地の人形玩具と日本との関わりについて言えば、例えば、「エルツおもちゃ博物館・ザイフェン」の姉妹館が軽井沢に作られるなど、近年その関係を深めつつあることは確かである。

5) Hellmut Bilz, *Erzgebirgisches Spielzeugmuseum Kurort Seiffen, Museumsführer mit einem Überblick über die Entwicklung der erzgebirgischen Spielwarenindustrie von ihren Anfängen bis zum Jahre 1945*, Seiffen 1990.

とにしたい。またこのガイドブックは第一版が1970年であり、事実上、旧東ドイツ時代の書物である。それゆえ、社会主義的思想との連関が背景にあることを意識しておく必要があるだろう。なお史料の分析や諸年号については、本来、複数の文献にあたって検証してみることが必要であると思われるが、本稿ではそこまでは踏み込まず、まずはガイドブックの概要の紹介に留めておきたい。

○ザイフェン地域一帯への入植 [S. 7]

11世紀頃のエルツ山地はまだ大きな一つの森林地帯であった。神聖ローマ皇帝オットー 2 世の記録文書（974年）、およびメルゼブルクの年代記編者であるティトマー司教の記録文書（1004年）によれば、そこはまだ「エルツ（Erz = 鉱石）山地」という名称ではなく、「暗い森」あるいは「ボヘミアの森」と呼ばれていた。そこには尾根を横切ってボヘミアの平地へと抜ける南北に走った交易路がすでに存在した。この交易路の一つに、「塩の道」と呼ばれる交易路があり、これはハレ、ライプツィヒ、ザイダ、プルシェンシュタインなどを経由して、プラハへと通じている。ただし12世紀の中頃まではまだ入植者はなかった。

13世紀の初頭になると、この塩の道沿いに城が築かれるようになる。ザイダには城および通関所が（1207年の文書に初出）、プルシェンシュタインには城が造られた（1240年頃設立）。これらの地域は政治的にはボヘミア王室に属していて、ビリナ伯スラヴコ⁶⁾の封土であった。それゆえ、ザイフェン一帯への入植はボヘミア（リーゼンブルクやオセク）からであったということが推察される。その際、シトー会修道士の助けが重要であった。この時代はフライベルクの銀採掘が隆盛で、それによってさらにザイフェン地域への入植が促進されたと考えることもできる。

6) 彼はリーゼンブルク城とシトー会修道院オセク（Zisterzienserkloster Ossegg）の創立者であるとも考えられている。またプルシェンシュタイン（ボルゼンシュタイン）城を設立したのは、彼の兄弟 Borso である。

この地域は数十年に渡ってボヘミア王の家臣やマイセン辺境伯の封土として度々その所有者を変えた。所有者の変更に発する封土認許状は、今日では最も重要な史料である。これは私達にザイダ・プルシェンシュタイン地域へのさらなる入植について伝えるものであり、ここからおもちゃの村ザイフェンに関する最初の文書による情報を読み取ることができる。

○ザイフェンに関する文書上の最初の言及 [S. 8-9]

ザイフェンの成立史にとって重要なのは、1324年7月26日にチューリングン方伯およびマイセン辺境伯とベルガウの兄弟との間でかわされた封土契約である。

私達が高貴なるオットー・フォン・ベルガウ兄弟また彼らの相続人すべてに対し封土として貸与するのは、ザイダの城と街、およびプルシェンシュタインの城、加えてチンザイフェン (cynsifen)、通関料、管轄権……。 (下線は本研究ノート筆者)

この史料は当時ザイフェンが錫洗鉋を意味する「チンザイフェン (cynsifen = Zinnseifen)」という名で呼ばれていたことの証拠になり得る。もちろんこの点に関しては、本当にこの言葉が村落としてのザイフェンのことを指しているのか、あるいは通関料の課税権や管轄権との関連において単に錫洗鉋の権利が貸与されたことを意味しているにすぎないのかどうかといった疑念が残る。しかし、錫洗鉋が1324年ではすでに長きに渡って行われており、収益を生んでいたに違いないということは事実である。さもないれば、錫洗鉋はこのような封土契約の中で文書の形で確認されなかったに違いない。さらにこうした錫洗鉋に従事していた「洗鉋夫 (Seifner)」は、山あいの谷川が豪雨によって急速に水かさが増し、向こう数週間、数ヶ月間の仕事を失う危険にさらされた場合に、河の流れをすばやく整備することができるよう、錫洗鉋所のごく近くに住んでいなければならなかった、と

いうのも事実である。

したがって、この文書の中でチンザイフェンと呼ばれているところの近くには、山間労働を行う最初の入植者が存在し、この1324年がザイフェン村に関する最初の文書上の言及と見なすことができると考えても構わないだろう。

○ザイフェンの錫採掘 [S. 9-12]

ザイフェンの錫採取は、ザイフェン一帯の谷に風化によってできた堆積物を洗い (Ausseifen)、濾過 (Auswaschen) することによって始まった。錫洗鉦の技術に関しては、1557年の文献の中にその記述が見られる。洗鉦は自営採鉦者 (Eigenlehner) が土地を借りることによって行われた。洗鉦所 (Seifenwerk) の大きさは通常、長さ100ラハター、幅50ラハター (1 ラハター≒2メートル) ぐらい。自営採鉦者は、家族内労働者の協力のもと、自前で錫を探し求めた。また彼らは錫洗鉦の他に小規模な農業をも営んでおり、これは農民鉦夫の典型であった。こうした兼業が避けられないのは、たいてい冬期には錫洗鉦を休業せざるを得なかったからであり、また他方で、山岳地での小規模農業だけでも確実な生計を営むことができなかったからである。

洗鉦作業と並んで岩山での錫採掘 (Zinnbergbau) も15世紀後半には始まった。すでに1560年のザイフェンの谷には、水力で動く8個の碎鉦機があったと言われる。ただし17世紀末までは洗鉦所の許可請求がされている。したがって、ザイフェン一帯における錫採取に関しては、約2世紀間は洗鉦所と鉦山との両方で行われていた。

鉦山系の自営採鉦者は、洗鉦所での場合と同じように、単独で採鉦許可申請を行い、自らの手で作業をし、そのための道具を自分で調達した。ただし鉦石が表面に存在するか、自分や家族の力でも採掘できるぐらいのわずかな深さに存在する場合に限られる。しかし、やがて技術上の困難により、個々の生産者は共同作業団へと結集する。これは同職組合

(Arbeitsgenossenschaft), すなわち単なる製品生産者が連携した同業者組合 (Erwerbsgenossenschaft) である。そこでは、みんなが分業で生産し、自分自身の労働手段を持ち、自ら他の労働者を手伝い、手当を与える。このような同職組合は鉱山採掘における共同鉱山会社の基礎となる。しかし、当初は資本主義体制の共同会社になる予定はまったくなかった。そのうち、もはや自ら直接いっしょに働くことのない、外部からの鉱山株所有者が入り込んでくことで、鉱山採掘における資本主義体制の共同鉱山会社への移行が生じ、賃金労働形態が支配的になった。ザイフェンの鉱山採掘は18世紀初頭の最盛期まで自営採鉱者による鉱山採掘が圧倒的に多かったが、その後、賃金労働者が増える。

ザイフェンの鉱山採掘に関してはその始まりから消滅まで、荘園領主がその関税徴収権 (Regal) を持ち続けた。エルツ山地の銀採掘に対する関税徴収権が領邦君主 (Landesherr) に存在したのに対して、錫に対してはたいていの場合、領邦君主の関税徴収権がそのときどきの荘園領主 (Grundherr) に対して貸与された。ザイフェンの場合は、当地の荘園領主シェーンベルクが受領した。

1600年頃ザイフェンの荘園領主フォン・シェーンベルクは、「領主シェーンベルク鉱区監督官」のいる封建家臣鉱山監督局 (Vasallenbergamt) および溶鉱所を設置した。

○鉱夫から木材ろくろ細工師へ [S. 13-14]

木材ろくろ細工師 (Holzdrechsler) が「皿・紡錘ろくろ細工師 (Teller- und Spindeldreher)」として文書の上ではじめて言及されたのは、1644年である。この職業名はおもちゃ製造職人ではなく、単に日用品を作る細工師を意味している。ろくろ細工師という職業はこれ以降、鉱夫と共に恒常的に登場する。すでに17世紀においては、鉱夫とろくろ細工師との間に一定の相関関係が見られる。ろくろ細工師の数は、鉱山採掘業が一時的に停滞すると、常に増大する。18世紀の中頃には木材ろくろ細工師の数が飛躍的

に上昇したが、これは他方で鉱山採掘がますます衰退していく時代であった。よって、木材ろくろ細工師が広まった理由は、何よりも経済的理由であり、鉱山採掘における生産性との緊密な相関関係の中にあった。したがって、これまでとりわけ古い郷土資料の中にたびたび登場してきたものとして、ザイフェンの鉱夫は余暇の時間に彫刻をしたり、組み立て細工をしたりして、しだいにおもちゃ製造職人になったという考えがあるが、これには確かな根拠はない。

彫刻をしたり、組み立て細工を行ったりするのは、余暇の仕事である。しかし、このようなことをザイフェン一帯の典型的な農民鉱夫がそれを行ったはずはなかった。というのも彼らは鉱夫としての職業と並行して、生計を確かなものにするためにさらに農業も営んでいたからである。鉱夫が鉱山で重労働を行い、それに引き続いて、それにも劣らない農場での重労働を行った後、さらに彫刻や組み立て細工のための余暇を見つけたということとはあり得ない。

西エルツ山地における銀採掘の豊かな中心地の経済環境に関しては、そうした豊かさゆえに鉱夫が晩の余暇に彫刻製品を作ったということは明白であるが、こうした経済環境をザイフェン一帯の比較的稼ぎの少ない錫採掘へと型通りに当てはめることはできない。今日でもこれらの地域は状況が異なる。西エルツ山地では、晩の余暇に彫刻を行うという形が典型的であるが、ザイフェン一帯では産業という形に基づいた木材ろくろ細工とおもちゃ製作が特徴的である。

もしザイフェン一帯における木材ろくろ細工の導入を、鉱夫の晩の余暇利用での活動に帰したいのであれば、その細工の普及発展は、とりわけザイフェン鉱山採掘の最盛期に見いだされなければならない。というのも、この時代であれば鉱夫は確固とした生計基盤を有していることになり、副業を行う必要がなく、それゆえ余暇活動の時間を見いだしたかもしれない。しかし、実情は逆である。木材ろくろ細工師の数が増えるのは主として常に鉱山採掘業が停滞し始めるか、あるいはまったく衰退していくかの場合

である（17世紀末および18世紀中頃）。木材ろくろ細工師の数の飛躍的な増加が鉱山採掘業の衰退減退する傾向と緊密な相関関係を形成していたという事実は、余暇の時代ではなく困窮の時代こそが鉱夫に転業を強いたのであって、鉱夫でいるかそれともろくろ細工師になるかといった問題はなによりも経済上、生計上の問題であったということを裏付けている。

よってザイフェンにおける木材ろくろ細工は最初から職業として営まれていたのであり、本業としてであれ副業としてであれ、鉱夫が生計基盤を確保するにあたって必要不可欠のものであった。

○木材ろくろ細工師からおもちゃ製造職人へ [S. 14－15]

ろくろ細工による日用品の製作からおもちゃ製造へといつ移行したかについて、はっきりとは分からないが、長い期間をかけて、ほとんど気づかないほど徐々に進行した。

おそらく最初は自分の子どものためのおもちゃであったと考えられ、販売することは意図していなかったと思われる。木材ろくろ細工師は、生産過程で生じたくず木材からおもちゃを作っていたのであろう。自家需要としてのおもちゃ製作は、文書によって裏付けることはできないが、すでに17世紀には存在したと推測される。そして、木材ろくろ細工の普及にともなって、とりわけまた18世紀中頃以降の鉱山採掘業の衰退との連関において、ますます日用品製作からおもちゃ製作へと自家需要を経て移行した。

日用品の生産から産業的な基盤に基づいたおもちゃ生産へと移行するのは、18世紀の中頃であったと文書によって裏付けることができる。

ザイフェンでは産業分野のかなりの多くが木製品マニファクチュアであって、2～300人がそれによって直接生計を立てており、さらにそれ以上の人々が晩の余暇や冬期にまとまった副収入を得ていた。かつてはただシャツのボタン、木製の皿、糸巻き棒ばかりを作っていて、その売り上げは物の数ではなかった。しかし、もっぱら約50年前から製

品の多様性と美観性が向上し、それによって売れ行きも信じられないほど上昇した。今では、非常にたくさんの種類の人形、箱、筒、音の鳴るおもちゃの他に、現在とくに人気のある家、宮殿、教会、木、天幕、城壁（れんが）、建築用木材などを製作している。このような建築木材を使って、子どもたちは思い思いに街全体、要塞、修道院、庭、厩舎、納屋などを構成することができる。模造的な製品と並んで、実用的な器具も作られた。例えば、レモン搾り器、クルミ割り器など。

（1804年の史料）

鉦山採掘、木製ろくろ細工、おもちゃ製作は（ザイフェン一帯）の集落の経済生活に対して共通して重要な役割を果たしていた。しかし、かつて鉦夫が引き受けていた主導的役割は、木材ろくろ細工師やおもちゃ製造職人（Spielzeugmacher）に引き継がれた。

○世界市場における拡大 [S. 33－34]

ザイフェンのおもちゃの世界市場における拡大は、日用品の製作からおもちゃの製作へという移行現象と緊密に関連している。とりわけ18世紀の前半に生じたこの経過は、18世紀の終わりと19世紀の初めに様々な形で文献の中に登場する。

あらゆる商品が箱詰めになれ、ザイフェン製玩具という名称で世界中に送られていた。（1804年の史料）

ザイフェンのおもちゃは、それ以前にもすでに商品としての意義を持っていたが、ザイフェンのろくろ細工師と玩具は、18世紀になる前はまだ、「ザイフェン製品」という名称では市場に出回っておらず、むしろ別の名前で、「匿名」の作者のものとして、商業の中心地であるニュルンベルクやライプツィヒを通じて、あるいはグリューンハイニヒェンの取次業者を通じ

て、ドイツやヨーロッパの市場への道をとった。

このおもちゃこそが、ザイフェン製品という名称のもと諸地域に名声をもたらしたのだった。しかしまた、ニュルンベルク製品という名称のもとでは、その名声は減じられた。というのも信じられないほど多くの製品がザイフェンからニュルンベルクへと向かい、そして三から四倍の値段で外来物好きのザクセン人のもとへと戻ったからである。

(1824年の史料)

ただし、18世紀の中頃以降、ザイフェン製玩具は世界市場においてすでに名の知れたものとなっていた。

七年戦争（1756～）以来、おもちゃは実用的製品をますます押しのけた。そして、全ドイツの子ども部屋、たくさんのドイツ外の子ども部屋、ヨーロッパ以外の子ども部屋にさえ押し入った。(1824年の史料)

市場の拡大について改めて整理するなら以下ようになる。

- 1700年頃：ザイフェンのろくろ細工師が始めてライプツィヒの見本市に現れた。
- 1750年頃まで：おもちゃ生産への移行が強まる。商業中心地ニュルンベルクやライプツィヒとの取引が拡大する。「ザイフェン製品」という名称でブランド化（Herausbildung des Begriffes）される。
- 1750年以降：「ザイフェン製品」はザイフェン・オルバーンハウ・ゲリューンハイニヒェンなどの取次業者を経由し、ヨーロッパの市場でしっかりとその名が知られるようになる。
- 1784年以降：海外貿易の始まり
- 1809年以降：ザイフェンのおもちゃ製造職人がドレスデンで代理店販

売を行う。

○18・19世紀におけるザイフェン製玩具の輸出力の素因 [S. 35-38]

ザイフェン製玩具が輸出力を有していたことの要因として3点を挙げることができる。

- (1) 形状や包装形態における独自性の固守：芸術的な民衆創作物の健全さに根ざしつつ、ザイフェン玩具製造地域の中で独自の特徴を持ったある一定のおもちゃの型が形成されている。それらは、単純化と様式化を通じて、民衆感覚と子供の受容能力に適した、独特の形態を備えている。包装形態に特徴のあるものがあり、長円形の輪っば箱の中にミニチュア玩具が入っているもの、マッチ箱の中にミニチュア玩具が入っているもの、「動物」を舟の箱に入れて「ノアの方舟」を模したものなどがある。これらは「箱詰め製品 (Füll-und Schachtelware)」という名称でよく知られている。
- (2) 幅広い品目：おもちゃ製造職人は、自分たちの田舎風の村落生活をあらゆる姿で形作る術を心得ていただけでなく、都会の要求や外国の要望にも優れて順応した。
- (3) 製品価格の安さ：エルツ山地の玩具産業の発展に伴って、分業化と専門化が生じた。それはごく小さな家族企業体という形で始まり、特定のおもちゃ製造集団へと専門化するまでになった。ザイフェン一帯では、小さな家族企業が二、三種類のおもちゃに（例えば、家や動物だけに）特化して製作するのが典型的である。しかも、ごくわずかな種類のおもちゃしか作っていない家族でも、分業化が進んでいて、家族内労働者が何年もの間一つのおもちゃに関して同じ仕事だけを行うということがよくあった。細部まで及んだ分業化の結果、たいへんな

熟練と指さばきをもたらした。小さな家族企業体内における分業化や専門化と並んで、職業集団への専門化も見られ、こうした専門化は村落間で生じることもあった。個々のおもちゃ製造家族の中にまで浸透した高度な分業化と、個々の生産者、職業集団、村落の間で生じた十分な専門化は生産性を高め、当然のことながら価格設定に関して好都合な結果をもたらした。

○取次業の形成と役割 [S. 39]

エルツ山地の玩具産業の発展は18世紀以降ドイツにおける資本主義的経済システムの発展と並行して進んだ。少数の品目に専門化され、手工業的・家内工業的に生産活動を行う家族企業が自力で商売を行うこと、特に輸出取引関係を結ぶことは不可能である。というのも彼らには経験が欠けているだけではなく、専門化された製品（例えば、木だけとか家だけとか）は、幅広い品目を要求する買い手の要望に適さないからである。仲介役はさしあたって、自営販売業者が受け持ち、そこから18世紀中頃以降、取次業がエルツ山地の玩具産業の中で発展した。

ザイフェンでは1777年に最初の取次会社が設立された。しかし、大きな取次会社はオルバーンハウ、グリューンハイニヒェン、ヴァルトキルヒェンにできた。取次業者はおもちゃ製造職人の作った製品を買い集め、そこから特定の品目を組み合わせて、さらに都市や外国の商人に売った。疑いなく取次業は、エルツ山地の玩具を世界市場へ広めるのに本来的に関わったことで、大きな功績がある。しかし、おもちゃ製造職人はそれによって商売から閉め出され、ますます取次業に依存するようになった。取次業者はそれによってエルツ山地の玩具産業の内部で優位な立場を獲得し、生産に対して本質的に影響を与えることができ、それによって小さな家内工業のおもちゃ製造職人はますます取次業者に依存するようになった。同時に彼らは、資本主義的な経済システムに固有のあらゆる不確定要素を利用して、自分たちの経済的な力も強化した。一般にはっきりと言えるのは、ご

く少数の取次業者だけがおもちゃ製造職人と比較的人間的 (human) な商売上の結びつきを絶やさなかったが、その他の業者はみな資本主義的な経済システムに基づいた市場の変動を利用して、価格を体系的に抑制し、利益を増やそうとした。

現今のザイフェン事情

次に、現在のザイフェンに関し、その交通事情と観光事情について述べておきたい。ザイフェンという街は、おそらく現在でも多くの日本人にとってあまり馴染みのある場所とは言えないであろう。写真で見る限りのザイフェンのクリスマス風景は日本と同じ世界に存在するとは思えないほど幻想的であり、日本とザイフェンとの間には埋めがたいイメージ上の距離を感じる。実際に日本からザイフェンに行くためには一般にヨーロッパ内において EU 域内路線に乗り換え、しかもそこからバスや鉄道を乗り継がなくてはならない。とはいえ、フラウエン・キルヒェの再建やエルベ渓谷の世界遺産で有名なドレスデンからは、実はそれほど遠くない。以下では、ザイフェンについてのイメージを少しでも具体化させるため、私たち筆者が実際に経験したものを中心に、ザイフェンまでの交通経路や観光施設を紹介したい。

○ザイフェンまでの交通事情

個人でザイフェンを訪れる場合の経路は、ザクセン州都ドレスデン (Dresden) を起点にするのが便利だ。ドレスデンから自家用車やバスツアーではなく公共交通機関を利用してザイフェンを訪問する場合、ドイツ鉄道 (DB) とバス (VMS, BVO, VVO 等) を乗り継いで行くことになる。

日本のガイドブック⁷⁾ では、ドレスデンから、ケムニッツ (Chemnitz) あるいはフレーア (Flöha) で鉄道を乗り継ぎながら、オルバーンハウ

7) 『地球の歩き方 A14ドイツ 2007～2008年版』ダイヤモンド・ビッグ社、2007年、384頁

（Olbernhau）まで行き、オルバーンハウからはバスを利用する方法が紹介されている。オルバーンハウはザイフェンから最も近い鉄道の駅なので、鉄道の旅を中心にする人（鉄道のバスを持つなど）にとっては最適かもしれない。バスの所要時間が30分と比較的短いので、タクシーを利用するのも一つの方法である。ただし鉄道の検索サイトによれば、オルバーンハウでの乗り換えの際、鉄道駅からバスターミナルまで距離があるので、徒歩による移動時間が長く、ここが不安材料である。鉄道での移動にこだわらない場合には、ドレスデンからオルバーンハウまでバスで移動し、オルバーンハウでさらにバスに乗り換えてザイフェンまで行く方法もある。この方法は、所要時間が3時間程と長くなるが、オルバーンハウでの乗り換えの際、バスターミナル内での移動のみになるので便利である。

またオルバーンハウを経由しない方法もある。地理的にはケムニッツやフレーアよりドレスデンから見て手前に位置するフライベルク（Freiberg）まで鉄道で移動し、そこでバスに乗り換えてザイフェンまで行く方法である。この方法は鉄道から鉄道への乗り換えがないので、乗り換えのための煩雑さや待ち時間が少なくなる。またフライベルクでのバスへの乗り換えの際、バス停が鉄道駅のほぼ駅前に位置するので、その点も簡便である。今回の旅行では実際にこの経路を試した。

ドレスデン中央駅11：55発、フライベルク12：26着のRE3786、所要時間31分で、フライベルクに到着。いったん鉄道駅を出て、駅前の通りを線路に沿って3分程歩き、バスの停留所へ移動。フライベルク12：57発ザイフェン中央14：07着の737路線バスに乗り、所要時間1時間10分でザイフェンの町中まで来ることができた。待ち時間を含めて、所要時間2時間12分なので、接続も良い合理的な移動方法である（2009年08月22日現在）。交通費に関して言えば、片道一人当たり鉄道料金6.9ユーロ、バス料金5.4ユーロ、合計で12.3ユーロであった。ただし料金は、日程や時間、各種の割引を利用するなどで、大幅に変動する可能性があるろう。

実際にザイフェンの観光サイト⁸⁾を概観すると、バスで移動する場合、鉄道で移動する場合という項目から、鉄道 (DB)、バス (VMS, BVO, VVO 等)、それぞれのサイトに接続し、そこで検索すると時間や乗り換え場所により、多数の可能性が提示される。

○ザイフェンの観光事情

今日ザイフェンは“おもちゃの村”という呼称で観光地化されている。そのためザイフェンを訪れる人は、主におもちゃ作りについての関心を携えて来ると言えよう。もちろん、ドイツ人にとってはおもちゃの村としてだけでなく、きれいな景色と空気を提供する魅力的な保養地でもあるが、そのような人にとっても、ザイフェンでの買い物やかわいらしい町並みでのちょっとした散歩は保養に加わる魅力の一つとなっていると考えられる。

おもちゃに関する観光施設については、主に以下の3つを挙げることができる。

- (1) エルツ山地おもちゃ博物館 (Erzgebirgisches Spielzeugmuseum)
- (2) エルツ山地野外博物館 (Erzgebirgisches Freilichtmuseum)
- (3) 伝統的手工芸の公開工房 (Schauwerkstatt der traditionellen Handwerkstechniken)。

(1) エルツ山地おもちゃ博物館について

ザイフェンの町の中心の便利な場所に位置するこの博物館は、1953年の設立以来、850 m² の展示空間に、エルツ山地で生み出されたおもちゃの数々を収集 (25,000点以上)、展示 (通常5,000点) している。受付と売店が2階にあり、メインになる2階、3階の展示室ではエルツ地方の多様な伝統的なおもちゃ、おもちゃの技法、おもちゃの形態の変遷、エルツ地方

8) <http://www.seiffen.de/>

の民俗学的な歴史などが学べるようになっている。また見学の合間には、子供が触れて実際に仕組みが楽しめるおもちゃの展示もあり、木製のパズルや積み木などのいわゆる子供向け教育玩具でじっくりと遊べるスペースもある。4階の展示室は現代的デザインの最新の木製おもちゃについての展示内容になっている。4階でも実際に触って試す空間が広く取られており、また吹き抜け空間や館内の随所に、からくりおもちゃなどが展示され、大人も子供も楽しみながらおもちゃについての知識を深めることができる。受付の隣には、映像ホールがあり、おもちゃ作りの歴史や技法についてのビデオが日本語でも視聴できるようになっている。博物館の隣は大規模な駐車場スペースがあり、大型バスのツアーでの見学が想定されているようである。ホームページによれば、年間15万人以上の観光客が見込まれているとのことだ⁹⁾。

（2）エルツ山地野外博物館について

野外博物館はエルツおもちゃ博物館の分館だが、場所はザイフェンの中心部からは離れており、バスかタクシーの移動が便利である。野外博物館にはエルツ地方の建築物が移築され、それらが点在して、仮想ではあるが典型的なエルツ地方の村が丸ごと一つ形成されている。19世紀中頃から20世紀初頭にかけてのエルツ地方の生活を知るには、大変有効な空間となっている。移築された建築物は全部で14棟あり、炭坑夫の家、おもちゃ職人の家、かご職人の家、きこりの家などの家々に一般庶民の生活が再現されている。つつましい生活にも職業によってそれぞれの特色が加味されていて興味深い。他には消防所、発電所、水車などの施設もある。この野外博物館では、実際の水車による水力でエルツの伝統的な技法ライフエンドレーン（Reifendrehen）を実演しているところを見ることができる。

9) <http://www.spielzeugmuseum-seiffen.de>

(3) 伝統的手工芸の公開工房について

この公開工房は、町の中心から徒歩数分の所にある。ザイフェンの町には数多くのおもちゃ工房があり、それに併設されるショップは自由に立ち入ることのできる場所として公開されているが、通常工房には自由に出入りすることはできず、見学したい場合には前もって連絡する必要がある（入場料をとって一般公開している工房もある）。こうした事情から、いつでも入場料さえ払えばおもちゃ作りを見学できるこの施設は観光客にとって貴重だ。公開工房では、ライフエンドレーンによるミニチュアの動物、立ち木を模したシュパンバウム（Spanbaum）、クルミ割り人形などの製造工程が見学できる。実際に使われる道具や機械、クルミ割り人形などの完成前のパーツなどを間近にじっくり見ることができる。またザイフェンで作られる製品やこの公開工房で作られる製品を販売するショップも併設される。

“おもちゃの村”ザイフェンは“クリスマスの国エルツ山地（Weihnachtsland Erzgebirge）”の中心地であり、村そのものが観光対象であると言ってよい。11月の末頃から始まるクリスマス・マルクトは、観光のハイライトである。ザイフェンの村のクリスマスの風景は、実際のおもちゃの中に写し取られ表現されてきたので、それはザイフェンの典型的イメージになっている。とりわけ、繰り返し描かれてきた村のシンボリックな存在である教会は年間を問わず、観光名所の一つとなっている。

こじんまりとした規模のザイフェンの村は、散策とおもちゃのショップ巡りに最適で、カフェやレストラン、大小のおもちゃを配した休憩するためのオープンスペースに事欠かないなど、気晴らしを求める観光客の要求にも十分応えてくれる。

ザイフェンの中心的なホテルでは、宿泊客にエルツ山地おもちゃ博物館、伝統的手工芸の公開工房の入場券やショップやカフェの割引などの各種サービス券を、チェックイン時に手渡してくれた。以下、次稿に続く